

## 25. Refetoff 症候群 (甲状腺ホルモン不応症) の1例について

佐々木憲裕, 武城英明 (川鉄千葉)

症例は71歳の女性で甲状腺腫と  $T_3$ ,  $T_4$  の高値と TSH の高値が認められたが, BMR は0%で代謝的には正常であった。TSH は TRH に対し過大反応を示した。 $T_3$   $75\mu\text{g}$  の5日間投与で TSH は正常域に低下し TRH に対する反応も正常化した。以上より本症例は, 甲状腺ホルモン不応症の全身型で, しかも部分的不応症であった。本症例では thyroid test や抗 microsome 抗体が強陽性であり, 甲状腺原発の異常が不応症と何らかの関連を有すると考えられた。

## 26. 新しい脳下垂体機能検査法の検討

### —GRF 負荷試験の有用性—

吉田明子, 西川哲男, 田村 泰  
吉田 尚 (千大)

最近合成されたヒト growth hormone releasing factor (=GRF) を用いて GH 分泌負荷試験を行なった。正常例では, 性差なく, 良好な反応がみられ, 汎下垂体機能低下症では GH 分泌低下がみられた。高プロラクチン血症例, 中枢性尿崩症例, 肥満例でも, 分泌低下がみられた。神経性食思不振症, 末端肥大症では, 種々の反応形態がみられた。以上の事より, GRF 負荷試験は安全で, 各種疾患の診断及び, GH 分泌調節機構をみる上で, 有用であるものと考えられた。

## 27. Glucocorticoid (GC) 高血圧時の Bradykinin に対する反応性について

吉田勢津子, 伊藤公道, 蓮沼桂司  
椎名達也, 田村 泰, 吉田 尚  
(千大)

SD rat に於て, GC 過剰投与による高血圧は angiotensin converting enzyme inhibition によって Na 利尿とともに降圧する。また, GC 高血圧に於て, converting enzyme inhibition 後の bradykinin に対する血管反応性は副腎摘出対照群と比べ著明に亢進していた。この血管反応性の亢進は  $\alpha$ -blocker 前投与, あるいは内因性 prostaglandin 抑制下でも影響を受けなかった。以上より GC 高血圧に於て, BK に対する直接的な血管反応性亢進があると考えられた。

## 28. Isolated hematuria の臨床病理学的検討

比留間 潔, 渡辺幹夫, 宍戸英雄  
(国立佐倉)  
浜口欣一 (同・検査科)

isolated hematuria 51例の臨床病理学的検討を行った。88%が chance hematuria であった。病理組織学的には, ①正常20例 (39%), ②糸球体基底膜の菲薄化13例 (25%), ③IgA 腎症15例 (29%), ④PSAGN 2例 (4%), ⑤膜性腎症1例 (2%) に分類できた。血清 IgA 値は③で有意に上昇した。Ccr は④で軽度の低下をみた。経過観察中, 20%が血尿消失, 67%が血尿持続した。7例 (14%) が, 蛋白尿の出現をみたが, このうち4例が, mesangium matrix 増加のある IgA 腎症であった。

## 29. 当院に於ける CAPD の実状

渡辺幹夫, 比留間潔, 館野純生  
宍戸英雄 (国立佐倉)

S55の治験開始後 CAPD 患者は20例を数える。特に S59 以後保険取扱い可能となりこの1年に8名 (5名は DM) に導入し, 当院の透析導入 DM 患者15名中1/3 を占めるに至っている。しかしその成績は芳しくなく CGN で243日に1回, DM で126日に1回腹膜炎を起こし, それぞれ33%, 75%の死亡率となっている。しかし当院の如く negative selection で血液透析のできない症例に CAPD を導入している限り止むを得ない成績であると考えられる。

## 30. 新東京国際空港利用者の救急受診状況

岸 幹夫, 安徳 純, 小方信二  
松本一暁, 松岡裕之, 横田 仁  
(成田赤十字)

我々は昭和60年1月~9月の間に当院を受診した新東京国際空港利用者の患者につき分析した。①日本人52人 外国人38人が受診。この内34人が入院。②内科が69人を占めた。③消化器疾患が最も多かった。④消化器疾患患者は伝染病棟で管理する事もあった。⑤旅行中増悪する慢性疾患患者があり, この点教育が必要と考えた。⑥外国人患者については言語の問題, 費用が自費扱いで高額となる事などにつき改善を図って行きたい。